新勅撰和歌集 上

九曜文庫

ちてこされけんとのことをうけ給はくわかくにの
やまとうたといふことはいにしへのひさしき代
むかしよりつたはりてすゑの世のなかに
つたはりいまにいたり古今後撰ふたつの集のこ
ゝろをえておかしむやけるよなすへてかゝる
しかるまゝにたゆましむかしのひとのことは
そのみちなかくこれにまことはての雲の
うへもめされてもさこれ月よゆしく
まことにもしあめのしたをうけたまはりを
こゝろあふさなくまれなりしかれ

こゝに御世しとわきしけさまりことにのそ
ませなまいてなゝそちあまるまれはあそ
ひたりしせなまのひしりめ後拾遺とえ
らひもとしいふんありけるしろるに金葉
はあれしこしろしめしてよりこのことをせ
あまりのち秋よりのうみさ川しさふこ
色まゝし河うふなつのけんら民は葉葉を
なひさよ緑こそりなきこりのことまてと
たさめあさくさるおとろへしとたにけるさ
まひさ秋津嶋之作しにみさまひあま

川日つきぬへくひさしかりなる延喜天暦
のむかしよりさきこそあかふかきにゆくこゝろふかゝらん
こゝろしきつりけるをしてふのえにかゝりす
又寛喜貞永のころまた世たえさまり人麿をく
たのしみことの葉をしたしめるならにと
なりふあつめえらひつかはし定家を御松
のとしつりかうかけの世にもつたはりまきり
てなしそらんれよりひふもえふかくしかの位
とこさうめて志をもかるゝをとこさてうみよい
きかたれとうけて志りふのふかけうさきと

なまつまかるよりあるへくもかくちかゝれのかたとを
つくんかへきくこのこゝろをむかふるへき天
ありせしとそうけるあまたになりて嘉夏
株みちかりぬしれとの葉をたしめて
其乃見んよくといたひあまてもちつり人の宗
とかさあれはそこなひ許をかやまひかと
けよいのりとひのうきしをこえむ月若ん
かりひとあのかゝりいてゝ海にく詠をと
わかちまれとゆくこめて立ちまれ海さとこ
乃かすへりうしれあまよもうきこあ

むかし貞永元年十月二日これをそ
うすなつけて新勅撰和歌集とに
世いふとしり

新勅撰和歌集巻第一

春歌上

うへのをのこどもとしのうちに春たつ
といふこころをつかうまつりけるついでに

御製

あら玉の年もかはらて立春は霞はかりそ空にしりける

立春のこころをよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

天のとをあくるけしきもしつかにて雲ゐよりこそ春はたちけれ

延喜七年二月内の御屏風に元日ゆき

ふれる日

紀貫之

きのふもあれみ雪ふるとしは年をもこして春てふけふに花咲らむ

題しらす

よみ人しらす

冬すきて春はきぬらし朝日さすかすかの山に霞たなひく

久堅の天のかこ山このゆふへ霞たなひく春たつらしも

春のはしめあめふる日華のちとせといふこころを

て侍けるは

京極前関白家肥後

いつしかと春ふりそむる春雨に色つきそむる野への若草

題しらす

大中臣能宣朝臣

我宿のかきねの草もあさみとり梅の春雨今はそめけり

三條右大臣家屏風に

貫之

とふ人もなき宿なれとくる春はやへ葎にもさはらさりけり

法性寺入道前関白家にて十首歌よみ侍けるにふるすのうくひすをよめる

権中納言師俊

鶯の鳴つるなへに我宿のかきねの雪は村きえにけり

鶯をきくといふ心をよみ侍ける

源俊頼朝臣

春くとは家よりさきに鶯は花のありかをそこと思え

久安六年崇徳院に百首歌たてまつりける

待賢門院堀河

雪まはいつしかふかき山のへのやかてかすみて八重かすみ谷河まさるなり

前参議親隆

まつ浦やむかしは夕霞のしくさき浦もあまれはる

法性寺太政大臣十首歌よみ侍けるに遠村霞といふことをよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

をちかたやふしみの里にかすむともまたは霞にむせふ宇治の川波

守覚法親王家に五十首歌よみ侍けるに

春哥

住吉の松の嵐もかすむなり遠里をのゝ春のあけほの　覚延法師

山のはも空もひとつにみゆる哉やかすめる春の明ほの
百千とりかな　源師光

小嶋の海や霞のをちに漕舟のまほにも春のけしきなるかな　式子内親王

後京極摂政左大将に侍ける時百首哥よ
ませ侍けるに　八条院六条

月かけてなかむる程は山のはによこ雲まよふ春のあけほの
をしらかす　曽祢好忠

佐保姫の面影さすなるかへるなり霞の色も春の野への
このめはる春の山辺をこえくれは霞の衣たちぬ日そなき
まれにのみあひみる春にしも我宿にとる
おもふ事はかりさゝすなれはおもさもふきて春そみる　山部赤人

山ちには雪ふりつゝもすらには柳のえたにきゐるうくひす

柳をよみ侍ける　伊勢

青柳の枝よりかゝる春雨はいとよりてぬける玉とそみる

天暦御時屏風哥　中務

浅緑そめてかけゝる青柳の糸をは春の風やよるらん

吹風にこほれぬ岸の青柳ハいとゝ浪さへよりかゝりけり

千五百番哥合に　二條院讃岐

もゝしきや大宮人の玉かつらかけてそなひく青柳のいと

春のころよみ侍けるに　按察使隆衡

かゝなへてこのめもはるの春風の吹てこそゆる青柳の糸

寛喜元年十一月女御入内屏風に山人家

柳をよみ侍ける　内大臣

うちはへて世ハ春なれや吹風も枝をならさぬ青柳の糸

正三位知家

山姫のこれをなくしつゝ春ハ霞たえせぬ青柳のいと

春の哥とてよみ侍ける　鎌倉右大臣

うちわたす遠さとをのハ青柳のいとそこさ山に霞たなひく

このねぬる朝けの風にかほる也軒ハの梅の春の初花

梅乃花をおりて中務かもとにつかハす

九条右大臣

いさやとて霜にまかへし我宿の梅とこそ見ね春ハ来にけり

つくしにて梅花を見てよみ侍ける

山上憶良

春されはまつ咲やとの梅乃花独みつゝやはるひくらさん

題しらす　凡河内躬恒

いつまてか野へにまかれは梅もなく見えてもあかにまかふ白雪

貫之

山風はふくとも見えや梅の花匂ふさとにたちもおくれぬ

亭子院歌合に　坂上是則

こきちらす鶯なくなる里はちりは梅乃花そちりける

題しらす　式子内親王

匂ひくるそこともしらぬ梅の香に秋の枕よりまさりけれ

権大納言家良

玉鉾のみちわけゆきて春風に匂ひさそはぬ梅か香そする

殷富門院大輔

匂ひまてともにとらぬそつらき梅花折てゝ匂ひを袖にあまて

正三位家隆

てらさぬ月の光も匂ふなる梅咲く山の嵐ふきあらせ

春歌とてよみ侍ける

後京極摂政前太政大臣

なにはつに咲や昔の梅の花いまも春なる浦風そふく

守覚法親王家五十首歌よみ侍けるに

覚延法師

春の夜の月に昔や思ふらん雲ゐの宿に匂ふ梅かえ

皇太后宮大夫俊成

梅かえも月はむかしは昔にて人こそかはれ春の夜の月

高陽院の梅花をおりてつかはして侍れは

大貳三位

にほひくる春の夜の空かすみては又花のかを月にそへしめつゝ

返し

宇治前関白太政大臣

空かすむこゝろも見えし梅花春の月にしもまた匂ひそみる

家百首歌に紅梅といふことをよみ侍ける

前関白

梅かえもあまきる月にまかへつゝそれともみえぬかすむ宿

後京極摂政家の哥合に暁霞をよみける

宜秋門院丹後

春の夜のあかつき月やこれならん霞にこもる明ほのゝ空

百首歌よみてたてまつりける時春曙をよめる

権中納言公時

明ぬるやみに思ひもしらす霞の家の夜はのあけほの

覚しらす

大納言師氏

久堅の月のいりのの空の雲まより思ひもしめの霞の衣

前大納言資賢

立かへりおまれと治つ節今ハあらせよ雲のかゝやらん
よみ人しらす
白雲の治ちまけてや春ハ風ふくまゝに花を咲らん
中納言家成家歌合し侍けるに山寒花
遅といへる心をよみ侍りける
藤原基俊
見人よ山ぬのつらむすへやものゝもとをかそへく
見しらす
修理大夫顕季
霞しくこのめはるさめふるごとに花の袂はほころひにけり
権中納言長方

花盛ふとあらすなみよしの吉野の山のさくらけたて
寛治七年三月十日白河院にて山乃花は
遠しといふ心を御しる白雲と見えしも
よる心をよみせたまひける
久我太政大臣
山桜こゝろさくらめすみる雲ハもとよりさくりちるらん
右衛門督基忠
春ハ雨ゆきぬさそふらん花の梢とみえつゝ
崇徳院近衛殿よりおなし世にさき乃こる
山花といふ心を講されけるにおよみ侍

けり

皇太后宮大夫俊成

面影に花のすかたを先たてゝいくへこえきぬ峯の白雲

家に花五十首歌よませ侍ける時

後京極摂政前太政大臣

昔誰かゝる桜の花を植て吉野を春の山となしけん

寂蓮法師

いつくにも咲ぬらん吉野山霞にあまる峯のしら雲

おなしく家に女房百首歌講し侍りける日花

うたよみ侍けるに

藤原成宗(?)

花の香もやとし山の峯ならぬ霧わけ嵐にかゝる峯の白雲

家に三十首歌よみ侍けるに花歌

入道前太政大臣

白雲のやへ山桜咲にけりところもさらぬ春霞哉

百首歌に

式子内親王

高砂の尾上の桜尋ぬれは都の錦いくへかすみぬ

葛城のたかまの山の白雲は花かあらぬかかへる旅人

歌合に雲間花といふことをよみ侍ける

前関白

ゆふとも雲とわかむ尋ぬれは花の木の間の桜なりけり

関白左大臣

立田よふ吉野の桜よりそてかけ雲にまかふて春の山風

典侍因子

はるまてもともにみえし山桜おなし高ねよりたてる雲

中宮少将

あえてふかき春かいく雲のゆきまて咲もそめぬ山桜かな

文治六年女御入内屏風ニ

後徳大寺左大臣

もろともにみそよつゝ我宿は雲かやへ川ふかくもかゝる

家ニ百首哥よませ侍けるに

後京極摂政前太政大臣

春はされおなし桜にふたてこそ雲とそまかふみよしのゝ里

清輔朝臣家ニ哥合し侍けるに花哥

俊恵法師

みよしのゝ花のさかりとしりなから猶白雲とあやまたれつゝ

正治二年百首哥奉りける春哥

皇太后宮大夫俊成

雲やこれ霞やまかふ山桜もよりかつも花とみるらん

千五百番哥合ニ　正三位家隆

春ふかみこれは雲も桜にわりてかゝるとこそみよしのゝ山

新勅撰和歌集巻第二

春哥下

みこにおはしましける時のはるうた

光孝天皇御製

山櫻あかぬこゝろの春霞いつかくれてみるよしもかな

題しらす　　山邊赤人

春さめのしくふれは里にすむ人は都に花をたつねす

貫之

あつさゆみはる山へにいる時はかさしにのみそ花はちりける

源重之

色ふかき春やまことになりぬらむ今そ山の櫻を雲かとそみる

山花未落といふこゝろをよみ侍ける

橘俊綱朝臣

またちらぬ櫻ありけりなほれ吉野の山の峰のしら雲

月あかき夜花によそへてよみ侍りける

和泉式部

いつもとも思はさりけり春の夜は月と花との匂ひまかれ

翫花といふこゝろをよみ侍る

藤原隆仲

よりみる宿は霞もこめつゝて花のところよりこそまよふなりけれ

百首歌たてまつりける時

たかさごのふもとの里はゆきもなくに尾上の桜雪とこそみれ

権中納言俊忠

堀川院御時女房達くして山の花見にまかりける日よみ侍ける

さしてすゝかけは桜いふそこそみる人とはにかはらねと

権中納言師時

立かへりやとはしまし山かせよ花ちるさとの人のこころを

藤原敦兼朝臣

こゝろあてにものありつゝをみつる雲井の山の梢をそみる

その日あふさかこえてまかりて侍けるに花山のわたりにまかりとまりぬ女車みなれたるとおほして侍るみちにさくらちりてむすさめぬ車まさしいまはまたを侍ける

よみ人しらす

あさまたきみそこそ山桜ちらぬ梢の花のたまよ

たかし御時中宮女房花見につかはしける日花ちる春なといふ心をよみ侍ける

権中納言国信

花さかぬと山のあなたの里人はよそにやまをといふかなと

おなし時鳥羽殿にて行幸の日池上花と
いふことをよませ給ひけるに
中納言實澄
櫻花ちる池の影見れは浪こそ花のおりかさなれ
法性寺入道前関白家にて雨中花といへ
るこころをよみ給ける
基俊
山櫻袖よりにほひやうつるとそ花のちるにそおもひかな
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
よみ人しらす

春かすみ年はへぬへきちる花をなしとかくなる鶯の聲
いろふかくみえし櫻も雨ふれはうつろひぬへくみゆる頃かな
延喜六年月次屏風三月雨ふれると
ころ
貫之
山田はへうへつくるとちる花のかことは風におほせ給はん
大宮清縄朝臣花見にいかむとて給つ
かはして給けるかへり
大貳三位
誰もみな花のさかりはあふさきのちりぬる歎やはてなる
後冷泉院御時月前落花といふこころを

よませ給ひけるに　大納言師忠

春の夜ハ月とくもりてみゆる哉梢にかゝる花やちるらん

建暦二年春内裏に詩哥をあはせられ

侍けるに山居春曙といふ心をよみ侍ける

六条入道前太政大臣

月影の梢にかゝる山の端は花もてはやす春の明ほの

権中納言定家

なこりなき峯の嵐も音たえて山桜戸の明ほのゝ空

暮山花といふ事をよみ侍ける

藤原雅経朝臣

あすもこん風しつかなるみよしのゝ山の桜ハけふ暮ぬとも

五十首哥たてまつりけるに花下送日と

いふ事を　後京極摂政前太政大臣

春乃日のなかくも誰かとかめんわか世の中ハ花の陰に

関路花

相坂の関路をすくる人の心はなれぬ花の白浪

越しらすす　西行法師

風ふけハ花の白浪いとゝこそ渡りにくゝも山河の水

春わかる折にし春乃花ちらてそのまゝ心有けん

権中納言長方

春風のやゝふきまくに高砂の尾上にきゆる花の白雲

前関白家歌合に雲間花といふことをよ
みはへりける　　右衛門督為家

をちのこす梢もみえぬ山桜花のあたりにかゝる白雲

藤原隆祐

かつらきや高ねの雲と思ひそてまかひし花乃色そうつれる

中宮但馬

みよしのやこゝのみの白雲をれやそれともみえぬ山桜かれ

建暦二年大内の花下にて三首歌つかう
まつりけるに　　大納言定通

ゆきゝのみちもさへぬね桜花ちりのまかひは春のいさよひ

太宰大弐重家家歌合し侍けるに花を讀る

源師光

桜花ちるをひとゝせ世をふともさてもあかそやこの世つきなん
思しらす　　鎌倉右大臣

桜花ちらはおしけん玉ほこのみちゆきふりに折てかさゝん

内大臣

はなもそは春はくらしれ色あらめくりやまとも初月影

参議雅経

春乃夜は月を在明よ如ふかりし河のふ花よあかつきまて

在原棟梁朝臣

うつろはん人の心そつらきものゝうさはみはれたつ雲

藤原信實朝臣

山桜咲ちる時の春をへてよそひは花のかけにふりにき

殷富門院大輔

桜花ちると春とおもひていつまての春にあかれはすらん

も寄よみ侍けるに

前大僧正慈円

花故ととひくる人の別まてをしめはしられけり山の桜

ちるもの故とそ嫌ふかれほとなむ宿の春の名残

後京極摂政前太政大臣

花はみな霞にこめてころひて雲よりたかくにほふ春の山

高砂の松のみとりは花の春まて残りける松のまつとも

建保六年内裏歌合春歌

入道前太政大臣

うらもなくさそうかたを春風のやよりさそふみね花の雪

見しらす

権大納言公實

山桜春の名残にさそはれて人の心の花そちりける

後京極摂政家歌合に遅日といふ事をよみ侍ける

按察使兼宗

なのめにもやくらうきんのちおかけて春のそらかな

堀河院御時おさなき人のさしたまひさくら
の枝にゆりをつけて給はせたりけるとて
よみ侍ける　周防内侍

のとかなる雲井はもとちかりして春のゆりゆかしけなく

寛喜元年女御入内屏風御色紙かたちに
まつと　正三位家隆

治まれる世のうつりかなる世のためしにおもひ出ぬ人そなき日まで
さかえこそ千世をかねて春の山とよろつめて
よみ侍ける　本院侍従

雲のうへにかけるかすみの霞立て猶やつかさん

歳時春尚少といふ心をよみ侍ける
大江千里

年月はまはりとさかへと君かへやはるもてさかふらん

千五百番歌合に　二条院讃岐

春風のみかきか程といふやほひのむめのにほふらん
たち花のなまり　入道前太政大臣

白雲にゆかしき花はありとみしやよひの月そ空にあまる

亭子院歌合に　貫之

ちりぬともありとたのまん桜花春はいそておもひかさなれ

参議雅實家歌合に

よみ人しらず

みなかみやいつくらん山吹の里の山吹の花
なかれてちるといふらんとよみける

皇太后宮大夫俊成

かはつなくと吉野の宮は河さへも山吹色にさきそめにけり
ちらす

徳大寺右大臣

駒とめて井手の玉みづ汲みてさへ山吹の花

蓋ぬ人をと

入道二品親王道助

忘れぬもまたぬも人のあきぬらん花の面影

花をおもふ我宿ちかき池の水

面中春花といふことをよみける

後鳥羽院

面ふれは春のゝ葉に袖かけてなく我身とぞ

五十首歌よみてたてまつりけるに

嘉陽門院越前

よその門面はいかにかはる春の花にそめてゆく波

百首歌に

前関白

家に百首歌よみけるに

立ちかへる春の色しかはすやまみの池の春波

関白左大臣

なきとむる家に夜をかさねわかる我をしらてやくれぬる春哉

内大臣

春のことゝ惜しむ心をつくさそぬる夕暮のさへ春なれは

久安百首哥奉りける時三月尽哥

皇太后宮大夫俊成

行春の霞の袖をひきとめてしほるはかりや恨かけまし

新勅撰和歌集巻第三

夏哥

題しらす　相模

都にも山ちにしけり立とまるほとゝきすけふ春にくれはとゝまらん

二條太皇太后宮大弐

夜をかさねちかへてきゝまさる山時鳥ひとこゑにそまつ

夏のはしめの歌とてよみ侍ける

二条院皇后宮常陸

春ふかみ花しらさけり郭公春乃別をとよますれに

家六百番哥合に首夏乃心をよみ侍る

前関白

きのふより涼しかりけり衣手やさらすてふ玉川の里

題しらず　よみ人不知

ちはやふるかものみつかきふゆかれてさかきもまさる葵なりけん

文治六年女御入内屏風に　後徳大寺左大臣

いくちよときみのみおもとにかさねつゝたのみそめけん菊のさかなん

寛喜元年女御入内屏風に　権中納言定家

久かたのつきのかつらにおもふ草そのかけも光よりて世ならん

中納言行平家歌合に　よみ人しらす

とむ里はしのふの森の時鳥こゑそしたてゝなけ

題しらす　田原天皇御製

神なひのいはせの杜の郭公ならしのをかにいつかきなかん

祐子内親王家紀伊

こゑたてしも猶そまたるゝ時鳥なく一声にあかぬこゝろを

郭公歌十首よみ侍けるに　法性寺入道前関白太政大臣

よしさらはなかてもやみね時鳥さらすは人のともまつまし

題しらす　大蔵卿行宗

いけのおもに生たれぬ人かるまてさ月のみつにしめるなるらん

建保六年内裏歌合夏歌　参議雅経

かるかやや五月の玉くしきふくさゝ急さてかきるとも

寛喜元年女御入内屏風五月沼江菖蒲

藻月　前関白

ぬまさはよりふかくそかひなるあやめ草ひきてみるかなしあへすそ ひく

入道前太政大臣

いつちよといはふかぬまにかはるやめ草なかきためしよしひくや ひかん

寛平御時きさいの宮の歌合歌

よみ人しらす

かくれてさ月の空をみるせいかなかなか万葉を刀ふみかな り

題しらす　貫之

かるかに急にしらりあやめ草ひきさ月を知りて待

わくらさすれうらこなくのを緒けらふ

正三位家隆

郭公そやとしりしぬまさとの花橘はさ月をまつらん

祝部成茂

今はやとひけけせかるかなくみれさ月さみたれ

白河院御時うへのおのこども大盤所の前方
まゐりの中まゐりたまふとて女房に花橘を
おりてさしいれけるにやさしくさしいれ
とて読侍ける　源師賢朝臣
時鳥こゑそいろこにやとるらん花たちもとを人におくりて
返し　康資王母
郭公花橘のやとられてそこうや草の枕ゆふらん
久安百首歌奉りける夏の哥
大炊御門右大臣
おちかへりまたなきわたる時鳥まつよそのそらにすぎぬなるかな

皇太后宮大夫俊成
はるかなる峯にも雉もなきさ夜風秋をまつられてもとふ時鳥
十首歌奉りける時
右兵衛督公衡
さ夜ふかき山時鳥なのりしてこさめふるよの今そなくなる
文治六年女御入内屏風に
後徳大寺左大臣
時鳥雲ゐのよそにすぎぬなり晴ぬ思ひのさみだれの比
寛喜元年十一月女御入内屏風に郭公を
よみ侍ける
右衛門督為家

なつかりのよしのゝあしのかりねもおもすかくらふ河なみか

庭ゝ郭公といふことをよみ給ける

権中納言長方

雨ふれはあまの河のみなかみは誰となふかのとかゝるらん

後法性寺入道前関白百首歌よませ給ける時

皇太后宮大夫俊成

五月雨をよめる

ほりそめていくかになりぬ河やそせともしらぬ五月雨の比

同し心をよみ給ける

後徳大寺左大臣

五月雨はむつきのあれ川やなきされたすなみやふちのしたくゝ

六条入道太政大臣

五月雨は伊せをのあまりけり藻草かきそもやらてくちやあさ（かさ／か）

前右近中将資盛

五月雨の日をふるまゝにいまはとてそこあさき沢みえぬやゝ谷の玉水

左近中将公衡

五月雨の比もへぬれはいさゝ河神ついりおさへせともなし

源家長朝臣

ふるくなく一かた夜もしらさしもさもかはる五月雨の比（雲）

春宮権大夫良実

袖のうへにふく風やまたかはかへむかしならされさしかはるかな

関白左大臣家百首歌よみ侍けるに

藤原光俊朝臣

五月雨の空にも月はゆくものを光みせよや三ち人のふき

宇治入道前関白家の歌合に

相模

さみたれはおそくもいつる時鳥歌ふく鳴し初音はかりに

前大僧正慈円

郭公さてはとや思ふ五月雨の雲のかなたなるそらの夕暮

郭公歌あまたよみ侍けるに

楠後堀院

時鳥こゝとも遠な足引の山ちふかくも暁の声

源師光朝臣

雨の空にまさりてやらん時鳥こゝにひとりなけれ五月雨の声

百首歌に

後京極摂政前太政大臣

時鳥今いくたひか契りなん五月のさ月のあり明の空

前中納言師仲

さ月のつこもりかたさ
そらくも右近馬場よりかへりて郭公きゝ
侍りしに

祐盛法師

またふかく契りし待へ世の時鳥のさ月をかけやおの

堀河院御時さくらの家にて国五月時鳥と

云心をよみ侍ける　権中納言師時

雲路よりいりもやらすかゝるなとたちとまりてそ空のなかめし

俊頼朝臣

庭よりや又さしいりけん見えそめし時鳥まつ月にはよりたちかへり雲

題しらす　覚盛法師

見るに月のそらとも見えし夕立はふりしまのかはなちきゝ

よみ人不知

草ふかきあれたる宿の灯の風にきえぬは蛍なりけり

家に五十首歌よみ侍けるに蛍

入道二品親王道助

白露の玉江のあしのよひよひに秋風ちかくゆく蛍かな

参議雅経

なにはめのすくもたく火の下こかれよるの入江にもえてゆく蛍かな

法成（性イ）寺入道前摂政家歌合

祭主輔親

夏の夜の雲路はるかになかむれは月のゆくへそ入かたのそら

夏月をよみ侍ける　正三位経家

夜はすゝしやとる清水のむすひしに月も夏をやよそにみるらん

題しらす

如願法師

おもふことみなつきぬへき月影の光もうすきよをやなけかん

いし山のおくのさ日くらしなかぬこそなくて

藤原實方朝臣

菜つもけさ山の井やゆふかけかはらぬ日数

寛喜元年女御入内屏風杜ある山井流
水ある所

正三位知家

夕暮は夜よりかねてゆく水のいはせの杜の風そすゝしき

海邊松下行人納涼乃所

正三位家隆

夏衣ゆくてもすゝしあつさ弓いそへの山の松の下かせ

見な月はらへの心をよみ侍ける

後京極摂政太政大臣

きやさせのこゝろぬるみのみそきしてゆく千ゝのなかはをそしる

寛喜元年女御入内屏風に

前関白

吉野川河浪たかく見えそめてしつゆふ葉のすゑはしけるし

正三位家隆

風そよくならの小川の夕暮はみそきそ夏のしるしなりける

新勅撰和歌集巻第四

秋歌上

はつ秋のこゝろをよみ侍ける

曽祢好忠

なゝれいかよの関もあけなくにまれに吹しく秋の初風

大納言師氏

なゝさのゆきあひみえし月かけに打渡したる白きをそみれ

大納言師頼

此ころはかたよる雨に吹風のおとにそ秋は空にしらるゝ

題しらず　西行法師

玉まおく露にこほれて武蔵野の草葉にかよふ秋の初風

正三位家隆

まつゆふは空もさひしくことゝいふかすかにかよふ秋の初風

右衛門督為家

なにとなく思ひしまりてものおもふ荻の上葉の露の袖かせ
うへの秋のことゝも秋の心をならひそめけに

藤原資季朝臣

足引の山の風のいつのまにかとふきさえて秋はきにけり

家に百首歌よませ侍けるに早秋の心を

関白左大臣

夜もすからてらふやいくふかゆのかん衣手すゞし来ぬる秋かせ

内大臣

あまの川風空ふきはらふ雲のかよひちをはれぬらし

藤原信実朝臣

よる浪のおとしくをもあらし忘さるへき袖しのゝ秋の初風

千五百番歌合に　宜秋門院丹後

ゆふ暮はいつもならひの袖のうへまでも露ぞさそふる秋は来にけり

法性寺入道前関白中納言に侍ける時

山家早秋といへる心をよませ侍るに

藤原正家朝臣

山里のくずのうら葉を吹くる風の音しきに秋をしるかな

殷富門院大輔三輪社にて五首歌よみ侍

によませ侍けるに秋歌

土御門内大臣

秋といへは心のいろもかはりけりなにゆへとしも思ひそめねと

題しらず

曽禰好忠

荻あさみなりふのかりそめなれとも山さとは荻風ぞ吹

徳大寺左大臣

夕暮は衣手すゞしたかゆくの杜のへの宮の秋の初風

もと里はゆきかひもまつ名方のあまのかゝに秋風ぞ吹

殷富門院大輔

かさゝきの橋とよそにわたる秋よ我にまかせ

法印献恵

天の川こよひねさめの秋風よりもみちの橋のなかやたえなん

百首歌めしける時　崇徳院御製

あまの川やそせ波もむせふらんとわたる瀬ゝにきえし

清輔朝臣家にて歌合し侍けるに七夕の心橋をよみ侍ける

藤原敦仲

ゆきの川きりの波によひこ星のまつむかへ舟いまやこぐらし

後三条院御時人々のこと歌院にて七夕の歌読侍けるに　前中納言基長

ことはらしさもあかつきに七夕おもふひとよ秋と契おきけん

法性寺入道前関白家にて七夕の心をよみ侍ける

藤原在良朝臣

天川星合の空もかはらねどかはるにつれてよその秋暮

宇治入道前関白の家にて七夕の歌よみ侍けるに

権大納言経輔

七夕のかゝるやあふとこよひにひとよの契そめけん

百首歌よみ侍ける秋歌

正三位家隆

草のうへの露とるけさは玉章にしるしかへりて梶の葉を

七夕後朝の心をよみ侍ける

権中納言俊實

七夕の天の川波立かへりこのくれはかりいかてまたさん

藤原清輔朝臣

天川なきさの草にをく露やあかぬ別の涙なるらん

八条院高倉

むつこともまたつきなくて秋風は七夕つめや袖ぬらすらん

前大納言隆房

たまさかに秋の一夜を待えてもあくる程なき星合の空

百首歌の中に　　式子内親王

秋といへは物をそ思ふ山のはにいさよふ雲の夕くれの空

二條院讃岐

今よりは秋のねさめをいかにともおきえしなて誰かとふへき

秋歌よみ侍けるに　入道二品親王道助

荻の葉に風のをとせぬ秋もあらは涙のほかに月はみてまし

入道左大臣

をきはらにふきしく夜はの秋風の波路そなかく露そふ(?)

題しらす

行尊(?)

いかにして物思人のすみかには秋よりほかの里をもとめん

大納言師氏

白露は草葉におきて秋のよを忘もせずになく松虫

秋哥よみ侍けり

右近中将公衡

よゐへ山のはをいづる月影をまちつゝ露に松虫哉

藤原教雅卿下

鳴そそのちゝなるせんかきちらす妹か人を松虫の声

人の松のことも清庭萩といふなとつゝ

まりけるに

權中納言隆親

つそこ宿の阿かれあまりそてあらし庭のちる秋萩のむ

題しらず　よみ人不知

白露のおきてたれの下紅葉衣よゝつ秋はさかりなり

いさゝかの秋風さむく萩の花ちらす白露おきしも

あすか川ゆきて見の秋萩は今ふ深瀬にちりかすさむ

柿本人丸

白露と秋の花をもこきませてわくとや我心かな

祐子内親王家小弁

さまざまに思ひゆき家機のつりとおもふ小萩花盛りを

白川院にて野草露繁といふ心を

ともにつかうまつりけるに

大蔵卿行宗

ら夜萩のむらさき露ふかくこゝろにおもふこゝろそもしれ

家に秋の歌よませ侍けるに

徳余右大臣

をのへのをかの夕露立そめてみたれてゆく秋萩のむら

在そ月ともおもはれて萩にうつろふ月のかけかな

藤原基綱

志らつゆのあしたの萩原咲しよりおきさそふ風のおとそ身にしむ

雲居寺瞻西上人歌合し侍けるに

権中納言師時

ねもころにさそへてなく萩のうへの露のこゝろもしらすかほにて

権中納言俊忠歌合し侍けるによみて

つらしけれ

按察使公通

女郎花あゆいなきさしらぬかなしきは秋の世よ

思ひしらす

二條院讃岐

露さえて根ねぬ女郎花ひとりや野への露をきりま

藤家万葉集歌

よみ人しらす

萩かはらこひくたちまつ女郎花人のこれ秋かくとも

式部卿敦慶の親王の家にまゐりてきて

あそひあかし侍けるにかくこそ見るへしとそ侍る

よみ侍ける　　三條右大臣

たえぬるも折てみる白露は昔にかはらぬふかゝりけるらし

久安百首歌たてまつりける時

左京大夫顕輔

まがきこそさなからみな白露に蘭露はむすふへとかはらぬものなり

題しらす

権中納言長方

何となくそのなかはすゝき萩落まつそ人の心をもみよ

参議雅経

萩落草の枝をとりそへ露の露やおきそふらむ

源具親

ふるさとの草の枝も萩落露かはしあへぬ秋はきにけり

閑庭落といふことをよみ侍ける

藤原信實朝臣

まねけとてうへし萩の一本にとはれぬ庭そ荒にける哉

閑庭萩といふことをよめる

藤原成宗

いて秋の風のやとりやたれかみえんみえすゝふる庭の萩原

題しらす

前大僧正慈圓

ゆふへは起てこゝ野をなかめけるまにあはれ秋なるやるかたに鶉なく也

よみ人しらす

おもふに誰とも志ら人秋常にあへまにこゆる秋のよの花

月哥あまたよみ侍りけり

後京極摂政前太政大臣

白雲乃ゆふかゝる山そなからの秋の月ともむかふよりの嵐に

権中納言経定中将に侍りける時歌合し

侍りけるによみてつかはしける月哥

大炊御門右大臣

あまの河そらに雲なき松風にすみまさりける秋のよの月

題しらす

正三位家隆

さしのほるやまのはいてゝ山のはのよりも嵐をわけて出る月影

延長比時八月十五夜月宴哥

源公忠朝臣

いつとてもをしとそ思ふ秋のよの月のこよひはいとゝをしかり

書和乃こゝろをひ百首哥よみ侍りける秋哥

権中納言定家

あまの原思へはかはる色もなし秋こそ月のひかりなりけれ

家に百首哥よみ侍りける月哥

関白左大臣

足引の山のはなしに雲さえてひとり宿りし秋のよの月

月乃哥とてよみ侍りける

藤原資季朝臣

見るまゝに冬やちかくなる月のかけも秋のそらにみちて

八月十五夜よみ侍ける

寂超法師

天津空しも夜のけしきをやはらむらん月にあまりて浮雲もかな

登蓮法師

ことわりと秋のなかばそしられける今夜またなる月のさやけき

後京極摂政左大将に侍けるとき月五十首よみ侍けるによめる

権中納言定家

あきは又秋のなかにも色ぞなきこよふく月のかゝみなりける

月こよひ見んと侍けり

左近中将基良

山のはに清くさかりやあかるらん雲よりあまる夜はの月かけ

権律師公猷

いはくかゝる雲はらふ嵐まちいつる山のはの月

中原師季

待えてもなほやとゝむる程そなき山のはふけていつる月かけ

真昭法師

袖の上に露おきそめし夕よりなれていくよの旅の月かけ

関白左大臣家百首歌によみ侍ける月歌

藤原頼氏朝臣

わきてなほ野原の露に袖のうへにまつやとりける秋の夜の月

入道二品親王家に五十首歌によみ侍りし山家月

正三位家隆

松のとをさしてしゆふの山かせに雲もかゝらぬ月をみるかな

文治六年女御入内屏風に

後京極摂政前太政大臣

東よりけふあふさかの山こえて都にいつるもち月の駒

和歌所の歌合に海辺秋月といふ事をよみ侍ける

小侍従

おきつかせふけゐのはまによる浪のをとともみえぬ秋の夜の月

百首歌に月歌

前関白

村雲の嵐にはるゝあとゝめて山のはにいつる月かけ

うへのをのことも海辺月といふ事をつかうまつりけるついてに

御製

わかのうらやあしへのたつのなくこゑに秋ふくる夜の月のかけさき

秋歌よみてまつりけるに

正三位家隆

しほかせのよその浦やさむからむ浦風なみの月もたまらす

名所月をよめる　藤原光俊朝臣

明石かたいさりのあまのかゝり火も雲ゐになかるゝ秋の月かけ

白河院鳥羽殿にわたらせおはしましけるに田家秋
興といふことをおのこともつかうまつりけるに

権大納言宗通

山河のすその門田のいねのほのかにてあけてもなほそふくとおとつれ

題しらす　藤原道信朝臣

はかなくも我宿とさりこめてあらむもみてねけさ哉

前大僧正慈円

秋にのみなほやゝひとり立そひて鹿なくこゑそ山里のよ
りにや庵の鹿も音にこそまさるらめ露の実や秋の霜

川鹿といへることを　正三位知家

鹿の音にそれともみえぬ夕暮に尾花下葉の露まさりけり

題しらす　正三位家隆

鹿の音に人もとひこぬ鳴けり竹の葉山のさゝ原の露

西行法師

をくら山ふもとをこむる夕きりにたちもらさるゝ
さをしかのこゑ

新勅撰和歌集巻第五

秋歌下

寛平御時きさいの宮の哥合歌

よみ人しらす

秋のよのあまてる月の光にはおく白露を玉とこそみれ

九月十三夜の月をひとりなかめておもひて

侍りける

能因法師

さらしなやをはすて山にたひねしてこよひの月をむかしみしかな

題しらす

小野小町

秋の月いかなる物そわか心なにともなきにいねかてにする

九月つきはつる秋よみ侍りける

選子内親王家宰相

秋のよの露をさまたる草村にけふかきりゆく山の端の月

くまなき月をなかめあかしてよみ侍りける

道信朝臣

よとゝもになかめはすれと秋のよのこのあかつきはさひしさそます わつか

對月惜秋といふ心をよみ侍りける

菅原在良朝臣

月みよとなれし秋をもとゝめなむあすはゆくさきの 空

秋歌よみ侍りけるに

侍従具定母

うき世をも秋のこゝろにすむ露乃身にをきところなく秋の月かけ

按察使兼宗

在明乃月の光はさやけきにやとる草葉乃露やおきそふ

左近中将伊平

みむろ山下草わけていく露にそてまて月乃影そうつろふ

百首哥乃中に　後京極摂政太政大臣

秋の戸乃明て在明になりゆくとして秋の月とや人のみるらん

建保二（六）年秋哥合てまつりけるに

参議雅経

身とも秋のわか世やいくよ更ぬらん月とのこやはまちとなれし

正三位家隆

かきりあれは明なんとする夜のまゝにしはしはさえよ有明の月

入道二品親王家にて秋月哥よみ侍りけるに

権大僧都有杲

風寒み月ハ光そまさりける霜かれ草木乃秋かれゆく

後京極摂政百首哥よませ侍りけるに

小侍従

いてぬるもゆく秋よりもあひおもふ人なき月乃影とゝめて

八条院六条

秋の来ハ物思ことのまさりつゝいとゝ露けきあはれそ
妹乃秋人しりつゝとにとさみそすのさかし
侍けるに　　京極前関白家肥後
妹の夜とおもふてハ暁乃露とおきゐてある袂
人乃おのことゝ妹十六日にまかり
けるに　　右衛門督為家
この里の末葉も多かるまて色かはる今やちまて
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
よみ人しらす
かく夜かせに袂乃露けきハ我身の萩よりかれハ成けり

題しらす　　柿本人麿
秋田かるたひのいほりに時雨ふり我袖ぬれぬほすよしもなし
躬恒
妹ふるき萩葉乃色見れはよふりそて鳴鹿そ思ゆれ
兵部卿元良のみこしのひて山こえ乃すまゐに
かよひともみ侍ける歌見すまはりてうへき付侍
よし子
かりふのゝこさきみまてとぬりそてなくしか山の秋そかなしき
題しらす　　中納言家持
秋萩のうつろふ移しとなく鹿の声きゝて山ハ紅葉しにけり

徳大寺右大臣

雲乃かゝるこしちをさしてかへるらし越路の山よ雁そ鳴

前大僧正慈円

むかしこその法猶ハ衰ふれ妹つりさくかゆそふれ恋

哥合しはへりけるに雁をよみ侍ける

前参議經盛

峯ふきこえつる乃ねちかく雲ゆき初葉吹おろすよるの嵐に

建保六年内裏哥合秋哥

八條院高倉

我宿ハなをうれし山のちかきわかれ世をこえてよるぬ日そなかれ

雁哥とてよみ侍ける

権中納言實守

不破山ちかきにをとる雁のねはいて聲をこえて妻をこふ

建保五年四月庚申五首哥秋朝

六条入道前太政大臣

たなはたと衰とおく雁の涙なりけし聲への朝露

洞庭雁といふことをよみ侍ける

正三位知家

さとりのあさゆくたゝなれの埋かなとみえぬ妻をこふ乾しらす

如願法師

はつしものおくねもしらすさけにけり嵐の後の峯の月
後冷泉院の御ときなかつきの
十日の菊あはせありけるを月おもしろく
せ給ひけれは　大弐三位
いつもみる月にはあらて月影よりもみえゆるは白菊の花
御まへにてまいりて侍けるにこの花をみて侍
つかへさせし御作しまいられけれは侍けつ
権大納言長家
月影におりまとはるゝ白菊はいつれか花かひかりなるらん
康保三年内裏菊合に
天暦御製
うけみえてさやかにてらす白菊はおりまよふ浪の花とそみる
崇徳院月照菊花といふことをよませ給
ひけるに
月影によるもわかれぬ白菊は心あてにそおるへかりける
右兵衛督公行
梅寮位公通
月前菊といふ心をよみ侍りける
月かけにうつろひそめてみえしかはかはらぬ菊のいろそかれける
猶余右大臣
ねまてする袖の月影さけにけりうつろふ菊乃花のうへ哉

題しらす　入道二品親王道助

我宿の菊の錦も色そ出こゝろさてみる人庭の秋かせ

秋ふかよる鳴たるに　権大納言忠信

なくもゆきてやさみる神なひの淀の波の色をとふへき　徳大寺太政大臣

よこの森や人の心ちにより霧のつくさの波に秋風そふく　如願法師

月は鳴るの浦風の吹まく秋にたちまとてや何ゆゑ　真昭法師

嵐吹とを山の朝衣うつも秋さむけ月にうつ也

擣衣の心をよみ侍ける　曾禰好忠

衣うつおと風をとさえて夜ふかし河霧にそ鳴なる

から衣うつ声きけは月清みまたねぬ人をそらにしるかな　貫之

久安百首歌奉りける秋の歌　皇太后宮大夫俊成

衣うつひゝきは月のなになれやさえゆくまゝにすみのほるらん

百首歌奉りける時　入道前太政大臣

風さむミ秋まれねは先のことふ夜まても中々夜ら寒き

前大納言隆房

今こんとたのめし人やいつはり月よなくく夜を川也

悲しらす

承明門院小宰相

月のゆくもはてもおしき秋風に我月ひとりと夜そふけり

月五十首哥よみ侍けるに

後京極摂政太政大臣

独ねの夜さむになれる月みれは時しもあれや衣うつ声

秋哥よみ侍けるに　権大納言家良

白妙の月の光にをく霜といく秋まて衣うつらん

正三位家隆

白妙のゆふつけ鳥もおもひわひなくやたつたの山の初霜

建保六年内裏哥合秋哥

みむろ山紅葉の錦ぬきさへおもしと秋の月影の[illegible]

百首哥中に秋哥　前関白

なかめよふしの葉にをきし露の上にはよそにて月の影宿る

千五百番哥合に　正三位家隆

秋の夜し吹よ我しふか山なるしは此下草冬まては

悲しらす

藤原信実朝臣

日さへては秋風はむささそよき竹ちのく末ゆさ紅葉なり

百首歌たてまつりける秋歌

入道前太政大臣

嫦のにしかせのひゆくとうきりとて袖よ時雨ふらぬ日そなき

参議雅経

秋のゆく野山のあさちうら枯て峯にわかるゝ雲そしくる
ゝしらす

徳大寺右大臣

かりなきてほのかにあさけの霧ふかみやへの外山の村雨のあり

西行法師

山里ハ秋の末にそ思しる悲しかりけり木からしの風

かきりあれハいつくハもみのまくらの空さやかすたるそとり宗

藤原伊光

秋のやましたかれゆくの紅葉をといふにそあまたにほふらん

建保二年秋歌たてまつりけるに

内大臣

湊河秋ゆく水の色そこき残る山なく時雨ふるらし

参議雅経

足引のやまたかけれハぬるゝ錦龍田の時雨いつそ染けん

僧正行意

我宿は外山の山の紅葉にもあさけの庭も紅にそふ色の

後法性寺入道前関白家歌合に紅葉をよみ

給けり　皇太后宮大夫俊成
このみちにきみがあとふむことのはの秋はことにみにぞしみけん
百首歌の中に　式子内親王
秋ちかき里人の(?)まつのかぜをいつもよりてもとまる秋風
関白右大臣家百首歌よみ侍けるに
権中納言定家
時雨つゝ袖だにほさぬ秋の日にさこそみむろの山はそむらめ
従三位範宗
露こそは色をそめけれ霧をこる山ふかみやちしほの紅葉
中宮但馬
いくとせか神なびの森時雨つゝよその紅葉よ染ぞめきけん
ことの松のことも秋十首歌よみ侍りけるを
ける(?)に　権中納言隆親
時雨きぬかたみよもひのたむけろ山の紅葉のみちに
題しらず　法印覚寛
そめのこす梢もあらじ村時雨そとのかなくむめてつる
建保四年右大臣家歌合に旅の紅葉と
いふ心を　正三位家隆
旅ねのみかはりにしきみちのしるべとちらせ秋のこゝろし
文治六年女御入内屏風に

後法性寺入道前関白太政大臣

ときはなる峯の梢にのこりきてさそひし秋のいろかれ

後徳大寺左大臣

木のはちる文吹こしてもろ錦たえ人よ見ましとせん

左京大夫顕輔家歌合し侍けるに紅葉をよ
みてつかはしける

権中納言経忠

嵐ふく峯のさくらも山の紅葉は河なみ乃ゆめにかよそこゝろて

家に百首歌よませ侍けるに紅葉のうた

関白左大臣

立田川見れはみむろの山のちる芸は紅葉を渡よそめ日そふさき

後京極摂政百首歌よませ侍けり

小侍従

なきて行鴫の羽風やこれならんみるまにかはる露の玉

秋のうたよみける

禎子内親王家摂津

ゆく秋の名をしも乃山の紅葉はいろみつりや萩のこゝろ

権中納言実有

こゝろのはそひとそめけん紅葉をと川せれ秋とは誰かなかるらん

参議雅経

秋かせに又ちる浪や立田川中せの浪も色かはるらん

九月盡よみ侍ける

入道前太政大臣

あすよりはかれん錦をなにゝこそ道はひもとかぬ秋の別路

八条院高倉

よそにてもぬれつる袖か月影のこゝろにて見んかきりける旅の錦

九月盡日伊勢大輔かもとにつかはしける

参議資通

年つもる人こそいとゞをしまるれ今日ばかりなる秋の夕暮

返し

伊勢大輔

あはれしき君かあつ秋のをしさにいさなしかしき老の涙

新勅撰和歌集巻第六

冬哥

題しらず

大伴池主

神無月時雨にあへるもみぢ葉の吹かばちりなん風のまにまに

相模

なにとなくひまなき袖を神無月ぬれしそむるは時雨ならねど

在原元方

まひくや神無月とはいはせんなにふれとしくふる時雨哉

大納言清蔭亭子院御賀の屏風に神無月

かくろへし子よやつまて冬くれはとゝまるいそさき

錦もろとすさまじき神な月乃つゆはあらしや
つもりけり　よし子
ちるまゝにこそ秋はさながら今は河なみよるかとや深き
影しらず　曽祢好忠
霧かゝり袖にあまれる神な月紅葉は雨とふりにける哉
前中納言匡房
に錦むらさきにも紅葉や秋のかぎり衣なるらん
のこしを秋のゝみねしの錦あらくもそでにつゝむこゝろしの風
権大納言宗家
後朱雀院御時うへのをのこ大井河に御幸
ありて紅葉浮水といふことをよみ侍けるに中
将によみ侍ける時　右近大将通房
あらしふく山のもみぢはちるらんは紅葉を浪とこそみれ
九条太政大臣
大井河に紅葉の錦をば浪のこゝろにまかせてや行
後冷泉院御時殿上の逍遥によみ侍しを
よみ侍ける　中納言資綱
紅葉の花のちりをやらぬ大井河をせは浪の花もさかえそめけ
白河院御時うへのをのこども月前落葉といひ
ふることを読侍るに　橘俊綱朝臣

冬かれ月さえみまさるこほりに志てゝあかりみちぬなり

題しらす　入道二品親王道助

こからしの萩葉吹しく庭の雪に露もおかぬ秋の色なれ

千五百番歌合に　大藏卿有家

霜さえぬひとめも今はまれそて松にとひくる風そかはらぬ

建保四年内裏歌合冬山霜

正三位家隆

冬こもりすやまこえの夕霜の雲のかなたに志ろき峯のかけ橋

冬閑月　藤原信實朝臣

山陰の滝よ秋とゝめぬ宿りのまも殊の霜夜月は見え

法性寺入道前関白内大臣に侍ける時家の
歌合に　權中納言師俊

霜むすふ霜枯のみすれなさるれは庭へてや菊のうつろひ見え

延喜十二年十月御前の庭に菊れはなをに
こきうへて御あそひ侍りけるによませ
給ひける　延喜御製

山庭よりけさうつろへる菊の花波のおるかそ冬まさりける

源公忠朝臣

かく霜よ見そめしそゝちてものさらなきふるかそえん

さとにはそれしけり日暮式部卿にはやく

そしけり

上東門院小少将

雲まなくなかむる空もかきくらしいかにしのふるしくれなるらん

返し　紫式部

ことハりのしくれの空ハ雲まあれとなかむる袖そかハくまもなき

山路時雨といへる心をよみ侍ける　源師賢朝臣

袖ぬらす時雨なりけり神な月いこまの山にかゝるむら雲

冬歌よみ侍りけるに　右衛門督為家

冬きてハしくるゝ雲のたえまにもひよりの木葉ふらぬ日そなき

正三位知家

時雨にハ松の葉をもなかりけり山ハみなから紅葉のころにて

法性寺入道前関白家歌合に

源兼昌

ゆふ日さしいつさ山のたかねよりうち時雨ふめる神無月哉

前参議経盛家歌合し侍けるに

藤原正重朝臣

山のはにいり日の影ハさしなからふもとのさとハ志くれゆくなり

平経正朝臣

村雲のかゝる山風はけしくて時雨とみえしハ志くれきそ木葉

建保六年内裏歌合冬歌

前内大臣

神な月しくれふりぬ山ゆきに袖もいろかはるまて

題しらす　　前大僧正慈円

み山木のおりそてまろ稍ちり杉しくれてはいろしをり

月をこふ秋のなかの夕暮に木の葉吹けり山嵐の声

前大納言忠良

秋のなかはおもひぬ山のこゝろしに月のかけにまそてまさる

殷富門院大輔

そらはむすこゑておつる白玉のゆらく稲葉の露の庭

正三位家隆

たての庭の白きをはるかまてさらに落葉に露そふる

千五百番歌合に

ゆふはらひさすふるさとの庭に露吹まよふ山風の声

百とせにみねけり冬の夜

参議成實

はるかなる秋にふるやなりゆく玉つけみむる山の時の声

建保四年百首歌中に冬の夜

前関白

いはゝしおもへ河浪さをはるそ寒ふる夜やこそむすふ

題しらす　　式子内親王

吹むすふあきにはおもちそて松まそ風の声もかはらぬ
おちたきつそきりにえ岩水もをよふへくゆみやなり
関白左大臣家百首歌によみ侍けるにおなしと
よめる　中宮但馬
袖やはむすへきねぬあまこそ見えし秋の波のおもむきかれて
題しらす　西行法師
風はえそよすまてはやこそたちかへる流なきさ志なみ絵
寛喜元年女御入内屏風湖邊ある結
内大臣
志かの浦やかりのひまそゆく舟の浪をみちわる世もやかたえ

千五百番哥合に　宜秋門院丹後
冬のきてはあまさかる嶺にそはえて雲はなちにおほる月かけ
二條院讃岐
うちはえて冬はからりある秋よ松のこりけるあり時雨月
久安百首哥奉りける時冬哥
皇太后宮大夫俊成
月清み千鳥鳴也おきつ風ふけ井の浦のあきらけみ
千鳥を讀侍ける　権中納言国信
夜をさむみまつてなき行小浦にもおきつ衛すゝ塩やくなる
源顕仲卿下

風吹ハ難波の浦乃濱千鳥あしまに波の立いそなけ

千五百番哥合に　源具親朝臣

行よ千鳥みなと吹こす志風に浦よりをちの友なきそ也

題しらす　徳大寺右大臣

風さむミ夜のふけゆけハいもかしまかたミの浦に千鳥なく也

寛喜元年女御入内屏風山野雪朝　前関白

年ゆかむと松の心をかはらてもさくらもみよしのゝ雪

内大臣

あくかれてかつみよしのゝ里よりや雪ふるをも山ふもつもる白雪

題しらす　権中納言長方

嵐ふくや梅の花やこゝろ有まてなかしのからにゆきつもる

宮木ひく杣山人ハ跡もなし檜原杉原雪ふかくして　正三位家隆

白妙や見ん松の葉山路さえて折しも雪をはらふあらし　賀茂重政

まきもくのひはらの山も雪とちて峰さへみえつゝ立のほる

高野に侍けるに寂然法師大原にすミ侍けるにつかはしける　西行法師

大原ハひらの高嶺のちかけれハ雪ふるほとを思ひこそやれ

題しらす　　刑部卿範兼

里つゝきみとりなる色も見えぬまてこせの冬野は雪ふりにけり

清輔朝臣

雲かゝりあらしの雪ハ冬ふかき月みる人の跡やなからん

百首歌中　　前関白

いさ人のあとつけもせぬ白雪にふりにし山路を出る月影

関白左大臣

山姫の袖ふる雪は白妙に吉野乃里ハはれぬ日もなし

冬月とよみ侍ける　　左京大夫顕輔

雪ふかき吉野の山の峯よりも雲の上にていつる月かけ

冬雪とてよみ侍ける　　後京極摂政前太政大臣

けさはまたいつもとまりし嶺の雲立ちそふ雪のあけほの

さりとてはふもとの山のいつかたに人やこゝも雪をわくらん

徳大寺左大臣

山里ハ路もなかりしむら雲のそらによりつゝ嶺の白雪

正三位家隆

あを海の雲ゐなかりの光まて山のはさむし峯の白雪

建保五年内裏歌合冬海雪

八条院高倉

里はまのさえゆくねやともる月によする波の音は白浪

正三位家隆

まつの原やそ嶋かけてふる雪はあまをさへ波にまかふ釣舟

高陽院家歌合に

康資王母

ゆきみまるまての杉むらもわかぬまてにふりつむ白雪

曾禰好忠

みやまへの山の木の葉と雪ふりさけてあそふ山人

堀川院に百首歌奉りける時

基俊

杉山の松の葉しのさふる雪は人めのみちもたえそしぬらん

建保六年内裏歌合冬歌

入道前太政大臣

つま木こる山ちもしらすやみえぬらん里にふりぬるけさの白雪

参議雅経

かり衣すそのもふかしはしたかのとかへる山の峯の白雪

関白左大臣家百首歌よみ侍りける雪歌

民部卿成実

はし鷹のとかへる山の雪のうちにそれともみえぬ嶺の椎柴

古渓雪といふ事をよみ侍りける

中宮大夫通方

谷ふかき雪にうもれてつもる年をそしるかき
家ゐならぬ小篠山雪とふ人もなし

前関白

しもやさえし日数もゆきもひさしふるみむろの山の松のしたをれ

歌合に寄夜嵐といふ心を

嘉陽門院越前

梅かえより袖にしられて山おろしにかへるとてかへるさのけ

後京極摂政家歌合に

隆信朝臣

いつかまた冬は小松にまつみよ冬なからる松をも風の過ぐるらん

題しらず

徳大寺右大臣

よのまにやそらも川とち水のおとなかれてさえし夜半の霜

五十首歌よませ侍りける時惜歳暮といふ心を

入道二品親王道助

とめかねてやるまてやさしき時のまもをしむあはれに年の暮かな

正三位家隆

はらへとも袖のうへなるしらゆきのつもるもしらてくるる年の暮

如願法師

おほくハかそふる歳も何の極とせて方志らぬ言の葉

題しらす　大納言師氏

百敷の大宮人もむれゐつゝ去年とやけふをあすハかたらん

貫之

ゆく年をしにおきとしても四方の春乃行ひよ

年のこゆまて

新勅撰和歌集巻第七

賀歌

貞永元年六月三日内裏にて初めて鶴契遐年といふ題を講せられ侍りしに

前関白

けふそ乃千代やはしめてこれ末まても古きためしと我世とやみん

関白左大臣

久かたのあまとふつるの契をそ千世乃ためしにかそふへきかな

寛治八年八月高陽院家歌合に月歌

周防内侍

つねよりもみかさの山の月影の光りさしそふあめのしたかな

祝の心をよめる　藤原行家卿

あめのしたへしきは代のはしまてみかさの山の榊をそ思ふ

百首の歌よませ給ひける時祝を

後法性寺入道前関白太政大臣

や千世へん君かためとや玉椿葉かへもせぬ色はそめけん

大宰大弐重家

むかし思ふむまれあへる千世をふる君かよはひは光ましそ照

堀川院御時竹不改色といふ心をよませ給ひけるに

富家入道前関白太政大臣

色かへぬ竹のけしきにしるきかな万世ふへき君かよはひは

長保五年左大臣家歌合に

藤原長能

君か代の千とせの松のふかみとりさはかぬ水にかけはみえつゝ

題しらす　實方朝臣

枝かはすかすかのはらのひめこ松いのる心は神そしるらん

天徳二年右大臣五十賀屏風

清原元輔

我宿の千世の河竹ふしとをみさも行末のはるかなるかな

勅使にて春日へまいりてよみ侍ける

中納言兼輔

生行の世をやことさらに君はちとせのかさねん

一品康子内親王裳着侍けるに

朝忠朝臣

皆人のいそとも思ひし世のためしに君を祈りかくれ

天暦御時几てもあそひにを侍けるに

中納言朝忠

おく山やたえしみねの小松葉をもけふとも千とせの風をきかなん

髭しらす　よそ人来

姉しさを首は袖にはみかりこまひ月にともあまりゆるか

長元六年関白志らかはにて子日し侍

けるに

権中納言顕基

千とせまでふるやまのへの君がためいくひさしかるまつのはいには

永治二年崇徳院摂政の法性寺にまかりて

世をへて松契千年といふことをよませ侍ける

大炊御門右大臣

しつかなる心あれや宮の姫小松にて世にいたさる(ん)

後白河院御時やそしまのまつりにまかり

てよみ侍ける

権中納言長方

神さひやいそつの松よいくよへぬらん世にかはりなしとや見る

仁安三年摂政家にて対松争齢といふ
ことをよみ侍ける

権中納言兼光

うへし松の松のみどりも君が代をきみにちぎる世の初なれ

建仁三年正月松有春色といふことをつか
まつりけるに

前左大臣

ときはなる松のえだも春これは千世の光やみさすらん

はいのちはしまはりてわかひとのへ侍ける

権大僧都良算

ゆきてみむ何とさそ我君の千代はちとせにこえてゆかなむ

おいのちをかれへしめにまよひ侍ける

入道前太政大臣

春はまつ子日の松にひきそへてなかきはしめに我もとくへやりき

天喜四年閏三月中殿にて翫新成桜花
宴

堀河右大臣

きみそみる玉のをそふれ桜花ものかけさき春にあまる色と

権大納言信家

つくりしも春色のときさく君が世にあかぬ桜の花をみるかな

寛喜元年十一月女御入内屏風京極人

都元日うくさまかな

前関白

神垣の森に松とふくたえのそめて千代そへて

江山人家柳　おなし

入道前太政大臣

あふみにはたかしまてやなきさの玉柳入江の波にみ舟漕まて

池辺藤花　正三位知家

春日ゆく春の下けふ多みそ逢よ池さゝ宿れ池の

四月山田早苗　内大臣

山田やかりいそく早苗にむらしくは每風みすとれ我宿のあ

八月山野月　廉あそふ亦

前関白

今そこれ和田をひよみすら出入ふまてさよそらも歟

人家翫月

我宿の光とみるし雲ゐよりの月とそ初めのとらふれは

田家西収興

とりあへは秋の雲ゐすいふ庭よりたて民れてぬ日そふさ

入道前太政大臣

秋とてく君かよひのおりすにら田のいとちつてむ

後嵯峨院御時中将公経と春日へまいり

てまけるさにたうそのとこにむしいまて

弘徽殿にあそさしてせ給けり

小野宮右大臣

万代乃始と祈てけふいまゆくすゑは松虫乃恩

九月九日従一位倫子にきくのわたをたまひ
ておいのこひすてよと侍けれハ

紫式部

菊の露わかゆはかりに袖ふれて花のあるしに千世はゆつらん

菊をよみ侍ける　元輔

我宿乃菊の白露万代乃秋のためしにおきてこそみめ

康資王母

長月に匂ひそめにし菊なれは霜もをしくおきまさりけり

後冷泉院御時菊映水といふ心を人々に
つかうまつりけるに

権大納言長家

神な月みきはの白菊はのこる秋のしるしなりけり

永保三年大井河に行幸九日によみ侍ける

六条右大臣

大井川ふるきみゆきにあらはれてよろつ世まての色そみゆる

前中納言伊房

大井川ふるきみゆきのあとをえて千代まてやすむ流れなるらん

寛喜元年女御入内屏風十一月豊明節会
舞姫立

入道前太政大臣

春ふかき難波のあしのみくさまてちりのふりまれつるの毛衣

後綸屏風に石清水臨時祭

権中納言定家

ちよ世まてよはひ篠竹の大宮人のかさすはかりに

嘉保元年大嘗会主基方丹波まつらの山

前中納言匡房

冬の夜の月のかつらの山人もとよのあかりにあひにけるかな

寛治元年悠紀方近江国こむかし山

時雨ふるむかし山の紅葉はいかにをりける錦ぬらん

仁安三年悠紀風俗歌鏡山

宮内卿永範

あまつちを照してそらにみかさ山まさに久しきさかえそみえける

貞応元年悠紀方多喜野

正三位家衡

冬くさの草葉の露をしきたへて玉磐みかくに月そみつけ

同主基方風俗歌いなさや山

権中納言頼資

はるみやま玉まつりえの千世まてもいなさやの山そうこころ哉

此屏風歌いとくらや山

足引のいはくら山の日かけ草かさすや神のみとしならん

題しらず　よみ人不知

月も日もかはりゆけとも久にふるみむろの山のとつみやところ

延喜六年日本紀竟宴に譽田天皇

西三條右大臣

年てらすかみのこころのかはらねはそのかけさへそ光そふらん

豊御食炊屋姫天皇

貞信公

はこしまのみよにつかへそめて世をよそにみしかはりけるかな

天平十八年正月雪ふかくつもりて侍ける日

左大臣橘卿ひきゐて太上天皇の

中宮西院にまゐりて雪をはらひ給ける御前にめしておほみきたまひけるついでにそうし給ける　井手左大臣

ふる雪のしろかみまでに大君につかへまつれはたふとくもあるか

右大臣の依保の家にてゆき世にもまかりける日

聖武天皇御製

あをによしならのみやこにたなひきてつかへまつるやとしそれとはみねとも

新勅撰和歌集巻第八

羇旅歌

大宰帥に侍ける時府官ともひきゐて香椎浦にあそひ侍ける

大納言旅人

いさやこし井ぬかたに白妙乃袖さへぬれてあさなつみてん

越中守に侍ける時くにのつかさ婦負のこほりにみよあそひ侍けるとよめる

中納言家持

婦負河のおきつ白波ありとよひいやしの菜よこくちえん

あをうつりける時ひらのみゆきし侍りけり
よみ侍ける

額田王

秋の野にお花かりふきやとれりし宇治のみやこのかりいほしそおもふ

芳野の宮にみゆきし侍ける時

持統天皇御製

見よしの山下かせのはけしきにはたやこよひもまた独ねん

慶雲三年なにはの宮にみゆきの日

田原天皇御製

あしへゆくかものはかひに霜ふりてはむきゆふへのことをしそおもふ

題しらす　よみ人しらす

いつくにか我やとりせん高しまのかちのゝはらにこの日くれなは
くるしくもふりくる雨か三わかさきさのゝわたりに家もあらなくに

弁基法師

まつち山ゆふこえ行ていほさきのすみた河原に独かもねん

亭子院宮滝御覧しにおはしましける
御ともに侍りまかりてひくらし野をすくとて
よみける

大納言昇

日くらしのゆきすきぬとおもひしもけしひとよくいまこそ
ふるふ山とこえ行きて

穏法云

都人とこそめてそゝらかね山岸ちかくしきさくらもえん
あはしまのなるとゝいふ所にてよみ侍る

恵慶法師

都にはいそくらんまたかくれはまちてくるちゝは忘わみちぬら

藤原惟規か越後へくたりけるにいひつかはし
けり

伊勢大輔

君やゆく思ふらん稚哀身にまかせねとも哀とそて
おもしらす

和泉式部

こし方を八重の白雲へたてゝもいとゝ山路のゝちの成れ
みちのくにまかりける人に

藤原清正
うちなれし別にし人と思ひきや又まれ松にねへんとそ悔しき

宇佐使餞に　　左京大夫顕輔
名残なく別るゝかたのまつにしも君をとゝめてすむちせん

題しらす　　道因法師
こゑかりをふさに歌く別路とおもひいるへきさんちをそせね

羇中暁といふこゝろをよみ侍ける
入道前太政大臣
旅衣あさ川暁の鳥のねに露かゝりける袖はぬれなり

別のこゝろをよみ侍ける
源家長朝臣
別路をしのひてこえし旅の空は雨つゝきにし河は涙なりけり

藤原親継
わかれ路の名をもたのますいとしの逢坂山は名のみふりて

土佐國に年へ侍ける時京へまかるとてよみ侍けるに
藤原兼高
暁そ猿さけひしたふしも宿こそ出しありあけのそら

権大納言忠信家歌合し侍けるに猿愁を
よめる
藤原信實朝臣
今ふりといふなる別の暁とつまこふ猿の空なれ

擣衣とてよみ侍ける

前中納言匡房

まろねして擣の衣まで出にけり[illegible]

宇治関白ありける時[illegible]

[illegible]惜暮秋といふことをよみ侍けるに

権大納言長家

神なびの[illegible]にやまかぜ[illegible]

歌合[illegible]のまとゐ[illegible]家にて[illegible]

よみ侍ける

権中納言通俊

いそくとも[illegible]擣衣[illegible]紅葉

関路暁擣衣といへる心をよみ侍ける

権大納言公実

鳥のねはゆるしけり擣衣ゆふともこえん関の[illegible]

久安百首歌たてまつりける時擣衣

皇太后宮大夫俊成

我思ふ人はみをやりつつもにきこえ[illegible]

[illegible]やをしさのうつ衣はねにも[illegible]

後法性寺入道前関白家百首歌よみ侍

ける[illegible]とよみ侍りける

後徳大寺左大臣

草枕むすふ夢ちハ都にてさむれハ旅の空そかなしき

百首哥たてまつりける時

後京極摂政前太政大臣

うき枕風のやとりを白浪の打よるひハ夢そとまれる

式子内親王

あら磯の玉よるとこふらねて我か袖をもかけぬなりけり

源師光

てる月のみちひるしほにさそはれて旅の日数を思ひしるかな

題しらす

鎌倉右大臣

世中ハつねにもかもな渚こくあまの小舟のつなてかなしも

入道二品親王家に五十首哥よみ侍ける

に羇旅

法印幸清

舟よそて雨ふりふる夕波によるとしらるるあまれい

旅泊の心をよみ侍ける

権中納言頼資

秋とてもうきねのまくらにハ月も泊ちれ来やなとおもハん

正三位知家

泊舩夜をもみていりうみなるあまのたくなハくるしとそみん

旅の心をよみ侍ける

参議雅経

立かへりみやこの峯に雲はとくやぬ嵐はけしに

真昭法師

月の色もうつりにけりなあさひ野の萩が花の露

みやこをわすれてところくにまよひてめくり
侍けるころよみ侍ける

八条院高倉

世をしとふ道にはかれなきこころこれ山とをへりとゝなし
白雲の八重立山とをかぬとも惜しとのみちはやまなく
建暦二年内裏詩哥合羇中眺望といふ
こころをよみ侍ける
六条入道前太政大臣

こえてこし山をいくへにぬるかりはとをくむすふ雲
建保二年内裏哥合秋哥
前内大臣

重ねても我やうらみん旅人のゆくみちのいくよの霧
世とのまてのち惜ていつつきなさる山を
こえ侍るふるむかしを思ふ侍てよみ侍る

蓮生法師

ゆきへの我とはおもしかさる山ゆるこえ山井のまへにわけは
あかしかんとよみ侍ける

前大僧正慈円

をりこえさなる山の麓にとゝめんとてまかりせん
みちの国よりのほりける人をくりてわかれにおし
みてよみ侍ける　禎子内親王家摂津
東路の野ちの草葉の露しけみゆくもとゝまる袖そ露けき
惟高のみこのもとにまかりて日ころ侍て
かへりて侍けるをひきとゝめ侍けれはよみ侍ける
業平朝臣
枕とて草ひきむすふこともせし秋の夜とたにたのまれなくに
なにはにみゆき侍ける時よめる
置始東人
おほとものたかしの浜の松かねをまくらてぬれと家しおもほゆ

新勅撰和歌集巻第九

神祇歌

延喜六年日本紀竟宴歌下照姫　　中納言当時

しな下てるひめのつまこひそあめにしたゆくたまるなれ

天慶六年日本紀竟宴歌国常立尊

中納言維時

あめつちてわかさむりしかはしめにそ万代まてにしらぬなるらん

月夜見尊　　源公忠朝臣

つきよみのかみのひかりてやすらかにあまてるひかり世とみえける

天児屋根尊　　橘仲遠

ひさしくもてる日の光ますすくにこやねのみこといつきそめけん

神楽のとり物の歌

ゆふしてはさかきそやまとみ河のいふむもともいさかゆくとしはふるともつきさかきとあつさゆみつきさきひとしるかな

堀河院北宮いそ給へりけるゝ宮の

ねのこたまつりてわさとなきねのはなとさこえ給りけるに内の御あそひよ家人々

を世給けるをかりひ出しよみ侍ける

二条院太皇太后宮大弐

ゆふしてや神の宮人あまはらにかさしそめけむ榊葉のえた

庚申に女房歌合し侍けるに　禖子内親王家宣旨

ゆふたすきいのりにかけし宮人は世ゝにかはらぬ神のまもりそ

閏三月侍けるとし歌たまはりて女房

しいて女房の中につかはしける　京極前関白太政大臣

春は猶のこれる梅と桜花たちならふまてさかりなりけり

賀茂臨時祭をよみ侍ける　法成寺入道前摂政太政大臣

いつまてハ神のちかひをたのむらん我よの末の人のそらん

おなしこゝろをよみ侍ける　貫之

山あゐにてすれる衣をたのみなくそ我は神につかふる

道因かすゝめ侍ける廣田社歌合に社頭雪

とよみ侍ける　三條入道左大臣

山あゐにてすれる衣はよふかきをかさす桜の花にそめてみ

臨時祭還立の御神楽をよみ侍ける　兼輔成實

立かへる雲井の月もさけそへて庭火のかけに山あひの袖

神楽をよみ侍ける

大納言通具

さか葉のしもふくかせや霜よ月影さゆるあさくらの声

建保三年百首哥奉りけるにみむろ山

正三位家隆

榊とりし遠きむかしもますす鏡の山風に月をかざす

百首哥よみ侍けるに

後京極摂政前太政大臣

よし川やそせ白波立ちて神ちの山の春とみゆれ

すゞか山いりなる下みちふるそいくよひさしきあさそへぬ 哉

建保六年内裏哥合秋哥

僧正行意

よろ山やまよりしらむ秋霧に入まで志賀のおもはさゝめ

日吉社奉納の哥とてよみ侍ける

前大僧正慈円

志賀の浦よいつゝの色の波そてゝたまくらけりすめるの跡

我日本すそのゝ空の光さへ山の麓すゝむ道なかれ

これよりさらに月かけとゞめ中とらすゝみのりの月のかけ見え

述懐の哥よみ侍りしに

我身のむ神りや種とねかすらんむかしの人の跡よ

社頭にて八十賀侍りける時によみ侍る

祝部成仲

うれしさは八十九まてになりにけりたえぬみちをもとめきて

千五百番歌合に　土御門内大臣

やはらくる神のちかひもはるかなるみよのはしめをまもる

あふひをよみ侍ける

参議雅経

うきそわかその神山のやまかつらひとにおもひをかくる葵

社頭にてよみてまつりける述懐哥

祝部忠成

家やふりみまもりの榊葉にゆふかけて世をいのるかな

題しらす　宗延法師

言の葉のあまねきもさかえける秋のこころの色に幸ひかなん

祝の心をよみ侍ける

賀茂重政

神山の榊も松もしけりつゝときはかきはのかけそひさしき

述懐の心をよみ侍りける

荒木田延成

やへ榊さしこめてし枝そへてやはらかにみえしをしらん

すらの國に神まし侍けるに小姫の年

よみてたてまつりける　　平泰時

ちはやふる神代の月のさえぬれはみたらし川もにこらさりけり

寛喜三年伊勢勅使にてくたり侍りける時
日ころ雨ふりて侍りけるに宣旨うけ給りて
本宮にまいりて祈請し侍りけるによみ侍りける　　卜部兼直

あまつ風雨のや雲吹はらへやおさまれる白妙のそら

むまの時よりはれそめ侍りける

神楽をよみ侍りける　　法印慶算

さよふけてあしろかふかくとつまてよふけぬれは光も神さひにけり

題しらす　　恵慶法師

霜のまにやらぬいろの葉をとやひらてにさすとそいふ神楽つゝ

能因法師

三河のきよくちなしそめ衣さそりみちにましる人やまうす子

新勅撰和歌集巻第十

釈教哥

土佐国室戸といふ所にて　弘法大師

法性のむろとゝいへど我すめは有為の浪風よせぬ日ぞなき

はちすの露をよみ侍ける　空也上人

有漏の身は草葉にかゝる露なるをやがてはちすにやどらざるらん

伊駒の山にてをはりとらんとし侍けるに　大僧正行基

法乃月久しくもがなと思へとさ夜ふけにけり光かくしつ

題しらず　千観法師

法身の月は我身とてらせとも世の人の雲にかゝれぬおもひなりけり

あまの戒うけ侍けるに　大僧正観修

頼みくる人の戒めをきくハ法乃さかりは今ぞしるらん

大僧正明尊山庄にて法花八講導師にて草木成仏のこゝろよみ侍けるときゝてよみつかはしける　大僧都深観

草木まで仏の種ときくつれはこれみちなる人ともなり

返し　　大僧正明尊

誰もみな鷲の山にそ入にける誰か月なりともわかさらめやは

錫杖の心をよみ侍ける

むつのわをとなへて三世の仏にはつえふるをとてそなる

法成寺入道前摂政家にて法花経廿八品歌よみ侍けるに序品を　　権大納言行成

昔みし花の色にほふはまことのみのりの初なりけり

五百弟子品　　法成寺入道前摂政太政大臣

さとりつる人なかりせは衣なる玉ともしらてすきましものを

廿八品歌よみ侍けるに同品

袖の上に玉をなしとそ見しかともいまそこにそえおなしなりける

少僧都源信

観音院に御封せられを行ける時の歌

冷泉院太皇太后宮

きのふまて民の煙のたえぬるはいさゝえてのみしるしとそ見え

発心和歌集の中般若心経

選子内親王

世ゝをへてときける法はおほかれとこれそまことの心なりける

普賢十願諸仏住世

皆人の光とあふくそらなれはのとけくて世雲かくれせて

薬王品盡是女身

ゆきつなる法をときてつみふかきつみはこれとおもふかな

百千万中に大悲代受苦の心を

式子内親王

きえかへる人の思ひに身をそへてかのそのみさへや立かはりなん

待賢門院中納言人々にすゝめて法花経廿八
品をよませ給けるに譬喩品其中衆生
悉是吾子の心をよめる

皇太后宮大夫俊成

みなしことなに歎きけん世中にかゝる御法のありける物を

随喜功徳品

谷河のなかれに意をとくむ人ゝもさくいつくしさけ

養福門院極楽六時讃を絵よりせられ侍て
うへにさうらはしまつりけるに虚空界をとひ
もろく観喜国とわけてゆかん

あはつ菊の露さへはまさひかよ雲れくゝへとるとそこあしき

白銀のうりさらまうて普賢大士来至させ

白象に月の宮とみえつゝ雨をけしきそひらあさゝう

舎利報恩講といふことおこなひ侍けるに

前大僧正慈円

きみの法は鷲の高ねに出し日のくれて後のひかりなきまゝ
さとりも雲ゐる稲よりまさりのちにてし世秋の夜月

金剛界乃五部をよみ侍りし 佛部
草のはに光もひかりしものゝ月にかくろふあれはひとつなるそ

慶暹卒のふをとよみ侍けり
かちりにつゝもなくなる光かくらり出し月とみゆれ

家に百首をよませ侍ける時五智乃大円鏡
智の心を 後法性寺入道前関白太政大臣
くもりなきかゝみのひかりますゝもてらさんかけにかくれさらなむ

阿含経 藤原隆信朝臣
おしとやは風のやとりをあらそはんつきなき野にとまりける

安楽行品 藤原盛方朝臣
山ふかく法とのみさえてきりあれやこれりにすゝ

法花經提婆品の心を 権少僧都慶忠
法のみち月とうたてしひ山へまりてなのかくそすゝ

紫式部か為にとて結縁經供養し侍
けるに薬草喩品をよみ侍とて
権大納言宗家
法乃雨に我もやぬれんむつましきわか紫乃草のゆかりに

廿八品の心をよみ侍りけるに寿量品

八条院高倉

身を捨て急ぬ人そうらきこゆふをたかき松かおきせよ

陀羅尼品

おほかたのまもりのひとつならぬ世の深いかにまもらん

勧発品　受持仏語作礼而去

寂然法師

あとふかくかへるねそつまそうみのりをも家つとにして

薩埵王子の心をよみ侍りける

殿富門院大輔

身をすつる衣をかけし竹の葉のそよいつかはおもひ出る光

百首哥よみ侍りけるに十界哥人界

後京極摂政前太政大臣

夏の世は月日をかくしあきくれて又いつとかも身をたのむ光ん

菩薩

秋の月かたふく秋のそらにふくかくれそのかこちをもなき

十二光仏の心をよみ侍りけるに不断光仏

源季廣

月影はいつも山の端もとつらきさまに光とみるともとは

如来無辺誓願仕の心をよめる

鑁也法師

教へおく法のちかひすに澄月を心のほかにもてこそみつ

中道観の心をよみ侍ける

信生法師

なかむれは心のそらに雲きえてむかしにかよふ秋の月影

悲鳴呦咽痛恋本群といふ心を

寂然法師

立はなれ小萩か原に鳴鹿は道ふみまよふ友や恋しき

自惟孤露の心を

寂超法師

ことゝふたのむかけなきはそなくつる林の宿そ恋しき

十戒のうたよみ侍けるに不殺生戒

法眼宗円

世をふかくおもふにつけてはなさるゝみのはかなさもかなしき

不偸盗戒

こえぬ身をおもひしられぬかをとつゝ立田の山の紅葉ゝ白浪

不慳貪戒

昔のこゝろちせぬよしからく遠されは雨こそくもれむ習

経教如鏡の心をよめる

蓮生法師

後の世を照す鏡の影をみよそにありぬふかきひとゝも

十如是の心をよみ侍りける中に　本末究竟等

寂然法師

小篠原おなじ野辺の一株にかれるも本末もかはらざりけり

後法性寺入道前関白舎利講のついでに

十如是をよませ侍りけり　如是躰の心を

後京極摂政前太政大臣

差の来れ粧よそほひし月影の秋まさることも世とてしなり

如是性

讃岐

ともそし思ひもえてねる月かげにさそひて秋の夜半の月

大輔人々に十首歌よませて天王寺にまうで

て侍るによみ侍りける

殷富門院新中納言

とめけることをみるもいとしく昔恋しきさ法の跡か

天王寺の西門にてよみ侍りける

郁芳門院安藝

はるかなる入る日をとてもとさかれにしかれとて眺れ

たのもしのち天王寺にこころをとめて侍りける時のに

かきさ付て侍りける

後白河院京極

西の海入日をさして門出して君のめぐみにとさらまし

なきさ人のをしへのうきそとおもひけり人あり

光明寺をかきてたてまつり侍るとて

高弁上人

かきつらね光のとやけかくさきもまもやまいあるらん
なふるり山中ありけん人のあるなり
つらしきつ
こゝに瀧や瀧くの岩波あかれ人をかしの風そ常は
暮の世のくらまりせいひてせん後の行法まてはそ堪
住房の前の岩にいとかあり定心石となつく
松ばかり縄床樹となつくりふくえこうて
座するにたよりありて正月思ふ日とて
ひまある行に座禅するに松のあらしときく

ふきそてとまみるその袖にあられぬりつるま
て侍けるを捨そていしれらへとしけるとて
衣裏明珠のあるひと思ひそよみ侍けつ
松のそて岩根の苔にすみそめの袖のあられやかけし白玉